

# 知的障害養護学校高等部生徒の学部授業への参加に関する研究

—「総合演習」における授業開発事例より—

古田 弘子\*・松村 忠彦\*\*

Exploratory Study of the Development of a “Sogo Enshu” Class with the Participation of High School Students of the School for the Mentally Handicapped

Hiroko FURUTA and Tadahiko MATSUMURA

## Abstract

An exploratory study of the development of a “Sogo Enshu” class was planned and implemented for the purpose of (1) providing university students in teacher training courses opportunities to learn in a shared environment with the mentally challenged and, (2) providing opportunities for high school students of a school for the mentally handicapped (SMH) to experience a class held at a university so as to expand their future learning options.

Class participation involved twenty-one university students and nine high school students of the SMH. The topic of the class was the culture and education of the handicapped in India and Sri Lanka. It was observed that high school students of the SMH took part in the class with a more positive attitude compared with university students, and also openly expressed their ideas with regard to their handicap, which may change the image of university students towards the learning needs of the mentally challenged.

## 緒 言

平成13年に文部科学省が示した「21世紀の特殊教育の在り方について—一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について—(最終報告)」では、「ノーマライゼーションの進展に向け、障害のある児童生徒等の自立と社会参加を社会全体として、生涯にわたって支援する」という基本的な考え方を示し、「後期中等教育機関への受入れの促進と障害のある者の生涯学習の支援」が対応すべき課題の一つとしてあげている。

現在、我が国において障害者の学校教育が幾多の課題を抱えているとはいえ発展・充実している一方で、上述のような障害者の生涯教育については、まだ試行錯誤の段階にあり今後の急速な研究の進展が必要な分野であると考えられる。

障害者の生涯学習を障害種別に見た場合、視覚障害、聴覚障害及び運動障害等の単一障害のある人々

の場合は、個々に適した情報補償・学習補助具の手段を確保することにより、生涯学習は健常者とほぼ同様に達成され得ると考えられる。しかしながら、知的障害のある人の場合は、問題はより複雑になると思われる。すなわち、知的障害者の生涯学習にあたっては個々のニーズに対応したよりきめ細かな配慮が必要だと思われ、情報補償・補助具さえ整えれば十分というわけではない。

次に知的障害者の高等教育の現状を見てみると、肥後・花輪(2002)による合衆国ニューヨーク州の実情報告では、コミュニケーション促進補助機器を使用することにより自身の考えを表出できるようになった知的障害者が大学で学ぶ様子が報告されている。

また国内においては、岩元・岩元(1999)は大学英文科で学ぶ知的障害女性の大学生活について報告するとともに、親としての立場から知的障害者が高等教育を受けるために必要な家族や周囲の支援について述べている。また、渡辺(2001)は専門学校での知的障害者受け入れについて報告している。このような先駆的実践が徐々に積み重ねられているのは事実であろう。

\* 障害児教育学科

\*\* 附属養護学校

松矢は1995年度より、養護学校等を卒業した知的障害のある社会人のための生涯学習の方法を「大学公開講座」の形態で毎年実施・開発してきた(松矢, 2002)。上述したような知的障害者の生涯学習の他の障害種と比較したときの困難性を考えるならば、実際に大学に入学しない場合においても、大学を知的障害者の生涯教育の場としてより広く提供できるようにする試みは、大学内の特殊教育専門家が今後取り組むべき重要な課題の1つであることは間違いない。

近年養護学校における「進路指導」は、「進路学習」という枠組みで、学校から社会への移行をねらった幅の広い学習内容で展開されつつある(松矢ら, 2000)。このような流れの中で、養護学校高等部の「進路学習」の中で、卒業後の充実した生活の一部を構成する要素の1つとして生涯学習を提示し、予備体験することには意味があると思われる。

一方、知的障害のある人の生涯学習を促進する上で見落としてはならない点は、彼らの周囲にいる専門家・関係者を含めた一般の人々の意識変革の必要性である。その理由は、健常者が知的障害のある人を見るときには、「知的障害者は何らかの手助けを必要とする人々である」という前提に基づいた見方をしがちであるという点にある。

筆頭著者が所属する教員養成系学部では、将来教員等として障害児・者と関わる可能性がある仕事に就くことが予想される学生の教育を行っている。現在、養護学校教員養成課程等教育実習で障害児に関わる課程に在籍する学生以外は、「介護等体験」により障害のある人とふれあう機会をもっている。斉藤(2002)が指摘するように「介護等体験」には「福祉ニーズをもつ人々の存在にふれる」、「人々の多様な価値観にふれる」、「個人の尊厳を学ぶ」、「コミュニケーションの多様性への気づき」といった意義があるとしても、「介護」という名称に示されるように、「介護等体験」が想定するのは、(健常者であることが想定された学生＝ケアする人)、(障害のある人＝ケアされる人)という固定化された両者の関係を基盤にした経験である。そこでは、その逆の関係は想定されていないように思われる。一般にこのような限定された経験しかもてない場合、知的障害者の生涯学習に関する具体的なイメージをもてなくても当然であると思われる。

このような限定された関係によりもたらされる、ケアを施す側である専門家や教員の予備軍である学生の意識を変革するためには、障害のある人と文字通り同じ立場に立って経験を共有することが1つの

有効な方策であると思われる。学生と知的障害生徒が共に同じ授業を受講することは、その1つの方法であると考えられる。しかしながら、これまでのところ知的障害養護学校生徒が、生涯学習の講座ではなく、大学の通常の授業を学生とともに受講するという授業実践は見あたらない。

そこで、本研究では、(1)教員養成系学部学生に知的障害のある養護学校高等部生徒と共に授業を受講する機会を提供することにより、彼らの知的障害のある人への見方を変革すること、及び(2)知的障害養護学校高等部生徒に大学の授業を受講する機会を提供することにより、進路の選択肢の1つとして、または将来の生涯学習の予備経験をさせる、という2点をねらいとして、教員養成系の大学の授業において、学部学生及び知的障害養護学校高等部生徒を対象に合同で行う授業の開発を行った。本研究の目的は、このような意図で開発した授業について検討し、さらにその意義について考察することである。

上述したような目的を達成するためには、大学の授業は、その背後に教授する内容が固定化した学問体系を有していない授業科目がふさわしい。そこで、今回は小・中学校の「総合的な学習」に対応する形で教職専門科目として設置されている「総合演習」の授業時間を活用することとする。

## 研究の方法

平成14年度前期の「総合演習」の中で実施した、教育学部学生と養護学校生徒がともに受講する授業実践について、VTR録画を通しての授業時に観察された事柄及び学生の発言の分析、感想文により考察する。

なお、VTR録画は共著者である養護学校教官が、一部一時停止をし、移動しながら授業場面を撮影したものであり、全活動場面が連続的に撮影されているものではない。

## 結果

### 1. 授業の概要

- (1) 実施日 2002年5月15日(水)午後
- (2) 授業のテーマ 「インド、スリランカの文化と障害児教育」

### (3) 受講者及び教官

- 1) 受講者 学生：教育学部3年次生21名  
(1名欠席)

養護学校生徒：高等部3年生9名

- 2) 教官 授業実施教官：障害児教育学科 1 名  
引率教官：養護学校 5 名

(4) 授業を行った場所

本授業を行った場所は、これ以外の時間で使用した通常の教室ではなく、熊本大学内五高記念館 1 階の教室を用いた。五高記念館は、養護学校からは徒歩約 7 分の距離に位置している。通常の教室を利用しなかった理由は、通常の教室が養護学校と同じ敷地内にあるため養護学校生徒にとってふだんとは違う授業を受講するという実感がもちにくい可能性があるのに対し、五高記念館に徒歩で赴き洋館で授業を受けることで日常とは異なる雰囲気により強く感じ取れるのではないかと考えたからである。

(5) 授業の方法

本授業は、総合演習「授業題目：現代の障害者問題を考える」（担当教官：障害児教育学科 2 名）の中の 1 回の授業時間を用いて行った。

本授業は、総合演習の第 4 回目に行った。なお、そのときの養護学校生徒の活動は、ホームルームにおける「進路の学習（大学体験）」に位置づけられ

ていた。

受講学生は、総合演習第 2 回目に養護学校の卒業生が勤務する保育園を見学した。次に、第 3 回目に養護学校を訪問し高等部生徒（1～3 年）と交流を行った。交流の内容は、運動会準備のためのさまざまな活動（下絵描き、振り付け練習等）をともに行うことであった。本授業終了後の第 5 回目には、再度学生が養護学校を訪問し、高等部生徒（1～3 年）と交流を行った。ここでは、運動会の片づけ（テントの片づけ、運動場の清掃）を主に行った。なお、第 3 回目、第 5 回目の活動は、養護学校高等部では「生活単元学習」に位置づけられていた。

このように、本授業は、既に保育園見学を通して知的障害者が一般の職場で勤務する姿を実際に見学した上で、その後の連続 3 回の養護学校生徒との交流の一環として行ったものである。

表 1 に、本授業を行った総合演習の授業日程の全容を示した。

(6) 授業の内容及び観察された事柄

本授業の時間の流れを、表 2 に示した。授業時間

表 1 授業日程

回数	日程	授業項目	授業内容
1	4月24日	オリエンテーション	前半及び後半担当教官が参加
2	4月30日/ 5月1日	<前半部分の開始> S 保育園見学（附属養護学校卒業生である職員 M さんの就労の場を見学）	2 日間に分かれて、保育園訪問 訪問時間は 1 時間半
3	5月8日	附属養護学校高等部生徒との交流	運動会の準備（活動）
4	5月15日	附属養護学校高等部 3 年生の生徒を大学に招いて授業を共に受講	五高記念館の教室で実施
5	5月22日	附属養護学校高等部生徒との交流	運動会の片づけ（作業）
6	5月29日	<前半部分のまとめ>	記録用紙に各自記録
7 ~ 10	6月5日~ 7月3日	<後半部分の開始> 担当教官による障害児の将来のイメージづくりに関するグループワーク	PATH*の手法
11	7月10日	<後半部分のまとめ>	各グループの発表 前半及び後半担当教官が参加

\*Planning Alternative Tomorrow with Hope（希望に満ちたもう一つの未来の計画）

表 2 授業時間及び指導上の留意点

時間	項目	留意点
12:50	大学生集合	通常の教室
13:05	教室への移動及び準備	大学生のうち半数は五高記念館へ先に行き教室を整える。残り半数は高等部生徒を迎えに行ってから五高記念館へ移動する。
13:20	本授業開始	50 分授業
14:10	本授業終了	

表3 授業の内容(1)「導入」

項目	概要	内容	観察された事柄
導入	挨拶  養護学校生徒へのお礼 授業内容について  インド(タミル語)の子どもの歌を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者と全員が挨拶「こんにちは」</li> <li>・授業者が、前の週大学生を養護学校に受け入れたことについて、礼を述べる。</li> <li>・養護学校で事前に授業内容について聞いていた生徒が、話の内容について少し話す。</li> <li>・言葉の意味を伝える。「チナチナ、アーサイ」→小さい物が好き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学生、生徒ともにやや緊張気味</li> <li>・生徒の発言をめぐって全員のあいだに笑い声がおこる。</li> <li>・養護学校担任の励ましの声かけが入る。</li> <li>・生徒がどんどん発言し始める。大学生の発言はない。</li> </ul>
スリランカの挨拶	スリランカ式の挨拶をする。 シンハラ文字の紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両手を胸の前で合わせ全員で「アーユーポーワン」と言う。その意味(あなたに長い生を)を伝える。</li> <li>・授業者が挨拶のことばをスリランカの文字(シンハラ語)で板書。</li> </ul>	
地図	インドとスリランカの位置を確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大地図上での生徒の国さがし(指さし)をゲーム的に行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・養護学校担任の励ましの声かけ「そこ、そこ！」</li> <li>・生徒がインドを偶然指さす。</li> <li>・大学生はスリランカを見つけられず、地図を見つめる。</li> </ul>

表4 授業内容(2)「国の概要と貧困」

項目	概要	内容	観察された事柄
国のイメージ	どんなイメージがあるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が先に意見を述べる。</li> <li>・次に、大学生に意見発表を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒から次々に意見が出る(「ラクダ、踊り、外国から生まれる」。</li> <li>・学生から「ウィッキーさん」</li> </ul>
文化	食事の方法について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業者撮影の写真を見る。</li> <li>・写真の食べ物をのせている葉が何の葉か問う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が葉の写真を見て「手で食べる」という指摘。</li> <li>・大学生を笑わせる役割の生徒が出てくる。</li> <li>・生徒が、椰子、バナナと意見を述べる。</li> </ul>
貧困について	貧しさについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・貧しい国かお金持ちの国か。</li> <li>・貧しいということは?</li> <li>・授業者から大学生に問いかける。</li> <li>・学生と生徒で話し合うように促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒3名が授業者とのかけあいのように発言する。</li> <li>・学生の発言「子どもたちも働いている」「道路とかの設備がない」</li> </ul>

表5 授業内容(3)「障害のある子どもの教育」

項目	概要	内容	観察された事柄
学校	学校に行くことは楽しいか、	・学校は好きか問う。 ・学校に行けなかったらどうするか。	・大学生の消極的反応 ・生徒「ごろ寝」大学生「アルバイト」
子どもの教育	インドの子どもはどれくらい学校に行っているか。	・授業者が板書 人の絵を10人描く。 ・小学校1年で学校に行かない子どもは何人が問う。大学生と生徒に問う①。 ・学校に行けないとどんな気持ちか問う②。 ・女の子のほうがもっと学校に行けないのはなぜか大学生に問う③。	・①あてられた大学生と自発的な生徒が答える。 ・②生徒が「いやな気持ち」と答える。 ・③声小さい。「・・・だと考えられているから。」
障害児の教育	障害のある子どもはどれくらい学校に行っているか。  インドの写真や作業学習場面を見る	・もし障害のある子どもだったら何人学校に行くと思うか問う。 ・上記の統計はないことを話す。 ・上記の質問を大学生に問う。  ・授業者撮影のインドの障害のある子どもが学校で学ぶ写真を見せて感想を問う。	・その場がしんとする。  ・あてられた大学生が「誰も行っていない」と答える。 ・上記の発言後、生徒(2名)の心情吐露(「知的障害は一番理解される方が少ない」、「できない、差別されている」)が相次ぐ。 ・生徒が「笑顔がみられる」と発言する。

表6 授業内容(4)「まとめ」

項目	概要	内容	観察された事柄
まとめ	授業の感想	・自ら発表を希望した養護学校(6名)及び大学生(6名)が、前に出て感想を述べる。	・生徒の発言(表7参照) ・大学生の発言(表8参照)
おわり	冒頭の音楽を再び聴く。退出	・写真や現地の障害のある子どもが作った製品をいくつかの机に配布する。	

は、養護学校高等部の1時間の授業に合わせて50分とした。

本授業の内容及びVTR画面で観察された事柄について、「導入」、「国の概要と貧困」、「教育」、「まとめ」に分け表3～表6に示す。

授業内容(4)のまとめの時間に設定した自発的な感想発表の場面で、養護学校生徒及び大学生が行った発言についてビデオテープをもとに書き起こし再録し、表7及び表8に記した。なお、ビデオテープの音声聞き取りが困難な部分については、〇〇と記

した。最後に、資料1に、5月29日の前半部分の授業のまとめの時間に記述し提出された大学生の感想を付す。

## 考 察

教員養成系学部「総合演習」に知的障害養護学校高等部生徒が参加する授業を開発・実践した。授業中の大学生及び養護学校生徒の授業への関わりを検討すると、大学生は最後のまとめの発表を除いて全員が授業者にあてられないと発言しないのに対し

表7 養護学校高等部生徒の発言

発言者	発言の再録
生徒A	今日は初めて授業を受けさせていただいて、本当にありがとうございました。聞いていてこっちがなんか、なんか、まっ楽しいこともあったんですけど、なんて言うか何か考えさせられることが少しあったような気がしました。本当に今日はありがとうございました。
生徒B	本当に今日はありがとうございました。いい授業を、まあ、F養護学校では、こういう話はないんですけど、。
生徒C	いろんな国の文化やいろんな障害者の扱い方がわかりました。正月にいろんなのをつくって食べるのがよくわかりました。〇〇（聞き取り不明）から勉強になりました。ありがとうございました。
生徒D	はい、今日は大学生の皆さんに教えてくださってありがとうございました。とても楽しかったです、今日は。これで終わりたいと思います。
生徒E	大学生の皆さん、ありがとうございました。
生徒F	大学に初めてきてこんな勉強があってとても勉強になりました。本当にありがとうございました。

表8 大学生の発言

発言者	発言の再録
大学生A	今日は皆さんといろんな勉強ができて楽しかったです。どうもありがとうございました。
大学生B	今日の授業は本当にこれ、始まるまでどんな授業があるか全然わからなくて、どんなことするんだろうと思ったんですけど、えっとけっこうまじめな話でとてもよく勉強になりました。そしてあの、一番自分的にほっとしたのは、インドの子どもたちはほとんど学校とかには行けてないんじゃないかと思っていたんですけど、実際のところ、小学校1年生に関しては8割の子どもが行ってるということ。そして障害者に関して〇〇ですが、3割くらいの子が学校に行っているということを知って、ああそうなんだあ、と思って、ちょっとうれいというのはおかしいんですけど、ちょっといい気分になりました。またこういう機会があったら、一緒に授業を聞きましょう。じゃあ、これで終わります。
大学生C	今日あの、F養護学校の学生の皆さんの意見を聞いて、ふだん皆さんがどういうふう考えているかがわかってすごく勉強になったし、楽しかったです。で、初めてこういうふうに参加して大学生と養護学校の学生さんがたぶん一緒に授業を受けたと思うんですけど、もっとこれからも、こういう授業、一緒に授業が受けれたら、ほくたちにとっても勉強になるし、養護学校の学生さんたちにとってもすごく勉強になっていいと思うんで、もっとこういうのが増えればいいなあと思いました。今日は、本当にありがとうございました。
大学生D	私は社会科の授業が苦手でスリランカとかインドとかの話になると、高校のときとかほとんど寝てたりとかしたんですけど、今日の授業はF養護学校の皆さんもちゃんと聞いていたのでえらいなあと思いました。で、F養護学校の皆さんの意見も聞けたし、内容もすごく個人的に勉強になって楽しかったです。ありがとうございました。
大学生E	今日は始まるまでどんなことをするのか先生に全然教えてもらえなくて、「行ってからのお楽しみです」と言われていたんですけど、本当に皆さんといろんな意見の交換とかできてすごく楽しい授業でした。で、この写真のスリランカの子どもたちもすごい笑顔で障害をもった人もすごく楽しそうに勉強している姿を見て、で、この授業でもF養護学校の皆さんも今日はすごい手をあげて〇〇してて、私たちがけっこう、大学生が押されているような感じだったんですけど、私もすごいこういう今日のような授業を受けるのは初めてで、（テープ中断）。

て、養護学校生徒は、全員が自発的に発言し、授業を積極的にリードする役割を果たしたことが明らかになった。これらのことから、大学生及び養護学校生徒が本授業において示した役割を類型化すると、大学生が非自発的・消極的であるのに対し、養護学校生徒が自発的・積極的であった。また、障害児の教育に関する授業場面では、養護学校生徒は自らの障害に関して考えていることを人前で述べるという行動が見られた(表5)。このような養護学校生徒の授業参加態度に直接ふれ、彼らの考えを知ることにより、大学生のあいだではこれに心を動かされ、またこれからも一緒に学ぶ機会を得たいという気持ちが生まれたと思われる(表8:大学生C, D, E)。このような相互交流を通して、障害者をケアを施す対象として限定的に見る見方は修正されたことが、学生の感想文から見て取れる(資料1)。以上の点から、知的障害養護学校高等部生徒と合同で受講する授業の意義は大きいことが示唆された。

養護学校高等部生徒との合同の授業開発・実践にあたって、いくつか留意した事項がある。第一に、本授業を連続3回の養護学校生徒との交流の中の1回として実施した点である。これが、本授業を円滑に進行する上で有効であったと考えられる。第二に、養護学校生徒が授業に参加しやすいようにする配慮であった。具体的には、授業時間の設定を養護学校

高等部と同様に50分とすること、事前にクラス担任が本授業に対する情報提供を行い生徒の参加意欲を高めること、養護学校生徒が発言し始めるまでクラス担任が後方から励ましの声かけをすることであった。第三に、授業の内容選択については、大学生が知る機会が少なく、大学生と養護学校生徒の知識量の差がそれほどないと思われるテーマを選択するという配慮をした。

生徒の障害については、授業者は「知的障害」という用語を使用しながら授業を進行した。それが、一部の生徒が自らの障害について語る道筋を開いたと思われる。知的障害生徒・成人として何らかの配慮を受けながら高等・職業教育や生涯教育を受けるためには、知的障害者を取り巻く人々の認識を変革するだけでなく、知的障害者が自らの障害に対する認識をもつことが重要であると思われる。しかしながらこの点については、本授業では試行的に実践したにとどまり十分な検討はできていないため、今後の課題としたい。

## 文 献

- 岩元魁子・岩元昭雄(1999)走り来たれよ、吾娘よ：夢紡ぐダウン症児は女子大生。かがわ出版。
- 肥後祥治・花輪敏男(2002)アメリカの知的障害者の生涯学習に関する調査—ニューヨーク・シラキウス地区—。小塩允護(研究代表者)障害のある人の生涯学習に関する国際的調査

### 資料1 「大学の講義をともに受講」感想(Gさん)

この日は雨が降っていた。私は、養護学校のみなさんを誘導して五高記念館まで連れて行くというグループになった。玄関先で待っていると養護学校の生徒さんが出てきた。その際に、養護学校の男子の生徒さんが「今日はよろしく願います。」と言った。私たちは大学生であって、高校生にその言葉を先に言わせてしまったことはまずかったと思う。私たちより、自分の考えをしっかりと表現できる生徒さんが多くて、圧倒されたと思ったのは私だけではないのではないだろうか。五高記念館にたどり着き、入り口でかさをおき、靴を脱いだ。その時、かさをもって中に入ろうとしている生徒がいたので、「外に置いてから中に入るみたいだよ。」と教えてあげた。この言葉はとっさに出た言葉だったのだが、「あ、そうですか、ありがとうございます。」とその生徒さんは言ってくれた。私はその返事がとてもうれしくて、たった少しだったけどコミュニケーションがとれたのでは、？と思った。少しずつ、自然に、ムリをしないでコミュニケーションはとれていくものなのかと思ひ、少し嬉しくなった。五高記念館の教室で、スリランカの障害児教育について、養護学校の生徒さんと一緒に勉強した。やはり、積極的に質問したり、意見を述べるのは養護学校の生徒さんで、ほんとに、自分の意見・考え方をしっかり持ち、様々なことを学びたいという姿勢が見てとれて、私たち大学生が見習わなければならない点が多々あるのではないかと反省した。また、先生が「養護学校の3年生の皆さんには知的障害があります。」とおっしゃられた時、私はビクツとしてしまったが、生徒さんはしっかり自分のことを分かっている、そのことを受けとめているんだなと思ひ、すごいな、えらいなという感情が生じてきて、私の中にあつた考え方がますます変わってきていることを実感した。

研究. 平成13年度「生涯学習施策に関する調査研究」報告書.  
国立特殊教育総合研究所.

熊本日日新聞(2000)熊本付属養護学校の卒業生3人:就職先は  
保育園. (11月16日夕刊)

松矢勝宏・原智彦・大沢和浩・松浦隆太郎・内海淳(2000)知的  
障害養護学校における「進路学習」のあり方をめぐって(自  
主シンポジウム25). 日本特殊教育学会第38回大会発表  
論文集, 157.

松矢勝宏(2002) [http://www.u.gakugei.ac.jp/~planning/  
achievement/2/241matsuya.html](http://www.u.gakugei.ac.jp/~planning/achievement/2/241matsuya.html) (東京学芸大学ホームペ  
ージ).

斉藤友介(2002)介護等体験の目指すもの. 斉藤友介・坂野純子・  
松浦孝明・中嶋和夫(編) チャレンジ介護等体験:共生時代

における障害理解のエッセンス. ナカニシヤ出版.

谷口和弘(2002)総合的な学習の時間としての「進路の学習」の  
検討. 研究紀要24「共に育む教育を求めて」～教育基盤の改  
善と新しい教育課程に対応した実践研究～, 103-108. 熊本  
大学附属養護学校.

渡辺亨(2001)TRY & トライ 専門学校進学への取り組み一宮  
崎県発軽度知的障害者を対象(宮崎医療福祉専門学校),  
Aigo(日本知的障害者福祉協会), 48, 8, 16-20.

## 謝 辞

感想文の掲載を快く了解して下さった教育学部  
学生のGさんに感謝申し上げます.